

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■73■

「10年後を考えて、種を蒔け」。これは、ビジネスでよく言われることだ。この大事さを実感したのは、ある種苗会社にお邪魔したからだ。

この会社は種子や苗を販売し、農家にアドバイスするために、自社製品をさまざまな方法で栽培している。養液栽培でも、養分を吹き付けたり、養分に浸したり。

そして驚いたのが、トマト。トマトが上に伸びていく特性を生かし、つるしたトマトの

ビジネスと信頼

未来見据え種を蒔く

木を収穫のたびに少しずつ降ろしていくことで、さらにトマトが上に伸びていくらしい。

まっているのだ。さまざまな形、さまざまな色。これこそ本当に「種々」と言える。

から、このことだった。その後、農家に試験栽培をしてもらって、果実の生育、種子の採取が安定してから、ようやく種子としての生産に入る事ができるらしい。うー、かなり息の長い、根気のいる作業だ。これこそ「10年

果になるか分からない「偶然」の要素があるとのこと。かなり大変だ。こうした話を伺うと、ある疑問が湧いた。「果実の品質」と「採れる種の多さ」のどちらが大事かということ。これをお伺いすると、答えは明確。「それは当然、果実の品質です。種屋は『信頼』が大事なのです」

これによって、かなり長期間栽培ができるそうだ。知らなかった。

というのは、違う品種を掛け合わせると、果実の品質や生育状況が安定するまでに数世代の栽培が必要となる

後を考えて、種を蒔け」なのだ。さらに、植物は生き物なので、品種の掛け合わせはどのような組み合わせがですか。

見学を終わっての感想。自分は10年後を考えて種を蒔いているかということ。皆さんは、いかがですか。

場や研究所にはさまざまな野菜や花が植えられている。消費者のニーズが多様化していることを受けて、農家もさまざまな種類の野菜や花を作る必要性が高



岡山和裕（おかやま・かずひろ） 1969年

7月生まれ。兵庫県出身。東京大学法学部卒。92年日本銀行に入り、業務局統括課長、決済機構局業務継続企画課長、情報サービス局総務課長などを経て、2018年4月から現職。